

竜の王子と
かりそめの花嫁

富樫聖夜

SEIYA TOGASHI



ノーチェ文庫

登場人物
紹介

沈黙の森の魔女

謎めいた女性。

少年時代のジェスライルに呪いをかけた後、行方不明になっていたが——？

ナディア

グリーグバルト国の中の王妃。
ジークフリードの「番」で、
彼に溺愛されている。

コール伯爵

グリーグバルト国の宰相。
フィリーネを説得し、王太子妃になることを承諾させた。

ジークフリード

グリーグバルト国の王。
昔「沈黙の森の魔女」と
恋人関係にあったが、
ナディアと出会った
ことで破局した。

シェルダン

ジークフリードの弟。
王宮の窮屈な生活を嫌い、
長いこと各国を放浪していた。

ジェスライル

グリーグバルト国の王太子。
竜族の血を引いている。
魔女の呪いが原因で、
運命の伴侶である「番」を
見つけられていない。

フィリーネ

没落した侯爵家の令嬢。
これまで社交界には縁がなかったが、
ひょんなことから仮の王太子妃として
王宮に上ることに。

目次

竜の王子とかりそめの花嫁

書き下ろし番外編

王太子殿下の独白

竜の王子とかりそめの花嫁

プロローグ 竜の王子と森の魔女

「運命だなんて、私は認めない！」

その悲痛な声と共に少年の頭を、まるで鈍器で殴られたかのような衝撃が襲った。圧倒的な「力」に抵抗できず、少年はガクッと膝を落とす。

「殿下！」

ここまで同行を許された唯一の護衛が慌てて駆け寄ってくる。激しい頭の痛みに、殿下と呼ばれた少年は立ち上がることすらできなかつた。

「二度と番（番）とは会わせないわ！」

目の前の女性が涙を流しながら叫ぶ。最初に見た時は思わず見とれてしまふほど美しい女性だったが、今その顔は悲しみと憎しみに歪んでいる。

「おのれ、魔女め……！」

護衛が憤怒（ふんぬ）の表情を浮かべて剣の柄（つか）に手をかけた。主の異変もたつた今、起きた不可思

議な出来事も、全てこの「魔女」が原因だと分かつたからだ。

——違う、彼女は魔女じゃない。

痛みと抗しきれない力の奔流（ほりゅう）に意識が朦朧（もうろう）とする中、少年は護衛を制止しようとした。ところがそのとたん、頭の中を搔き回されるような強烈な不快感がして、声も出せなくなる。

「殿下に何をした!? そしてあの子どもをどこへやつた!?

その護衛の言葉に、少年は引っかかりを覚えた。

——子どもとはなんだ?

だが、考えようとしても思考は形をなさずに崩れていく。襲つてくる「力」のせいだと思うものの、少年にはどうすることもできなかつた。

「殿下に仇（あだ）なす者は、魔女だろうが巫女（みこ）だろうが許すわけにはいかない！」

「……だめ、だ……」

かろうじて紡いだ言葉も護衛の耳には届かない。止めなければと思うのに、意識は急速に遠のいていく。

——だめだ。魔女ではなくて、彼女は……

剣を手に、女性に向かっていく護衛。その足音を聞きながら少年は気を失つた。

他の護衛たちが、異変を感じて駆けつけた時——そこには気を失った少年と、無残に切り裂かれて血の海に沈んだ護衛の遺体。そして他にもう一つ、魔女のものと思われる血溜まりだけが残されていた。

——それ以後、「沈黙の森の魔女」の姿を見た者はいない。

第一章 辺境の侯爵令嬢と呪われた王子

竜王の末裔(まつえい)が治めるグリーゲバルトは、三方を海に囲まれた海洋王国だ。隣国と陸続きである北部は、深い森にぐるりと囲まれている。人々から「沈黙の森」と呼ばれるその森には、怖い魔女がいると言われていた。一度入つたら出てこられないと恐れられ、地元の人間もほとんど近づかない。

ところが、そんな森に平然と足を踏み入れる娘がいた。他の人々にとつては魔女がいる恐ろしい森でも、その娘——フイリー・ネにとつては恵みの森なのだ。

今日もまた彼女はそこに分け入り、森の恵みをせつせと収穫していた。赤い林檎(りんご)をたくさんつけた木に手を伸ばし、果実を傷つけないよう優しくもぎ取っていく。背中の真ん中まで伸びた濃い褐色(かつしょく)の髪が、フイリー・ネが動くたびに揺れていた。

手の届く範囲にある林檎のうち、最後の一つをもぎ取ると、彼女は足元を見下ろした。「これくらいでいいかしら？」

林檎が山盛りになつた籠(かご)を見て、フイリー・ネは満足そうに笑う。

これだけあれば、しばらくお金に困ることはない。

最後の林檎を籠に入れるとき、フイリーネは木に向かって手を合わせた。

「竜王様、森の魔女様、森の恵みをありがとうございます」

感謝の言葉を口にしたあと、籠を両腕に抱えて出口の方角へと進む。

この「沈黙の森」には誰も近寄らないため、道らしい道はない。あるとしたら獸道くらいいだ。けれどフイリーネは慣れたもので、木と木の間をすり抜け、鬱蒼とした森から迷うことなく出た。

そして、待機させておいた荷馬車に林檎の籠を載せる。木との間をもう何往復もしたので、荷台には林檎の入った籠がいくつも置かれていた。全てフイリーネの労働の成果だ。汗を拭つて一息つくと、フイリーネは馬車の御者台に乗り込む。そして馬の手綱を引いてデコボコの道を進んだ。

家に帰つたら、家政婦のヘザーにパイを作つてもらおう。ヘザーが作るアップルパイは絶品だから、街に出て売ればいい値段になる。残りは砂糖漬けやジャムにして売ればいい。

林檎の活用方法をあれこれ考えながら、フイリーネは馬車を走らせる。途中、彼女の姿に気づいた領民が、農作業の手を休めて手を振つた。それに手を振り返しつつ馬車を

進めると、やがて大きな屋敷が見えてきた。小高い丘の上にどんと立つその屋敷が、フイリーネの家であるキルシュ侯爵邸だ。

遠くから見れば、侯爵家の名に相応しく大きく立派に見えるだろう。だが近づくにつれて、その印象は変わっていく。かつてレンガ色だった壁はくすみ、葛が這い回つている。いくつかの部屋の窓ガラスは割れており、雨風が中に入らないよう内側から木を打ちつけてあつた。

廃墟とまではいかないまでも、それに近い状態だ。

所々崩れた塀をぐるりと回り込みながら、フイリーネは屋敷を見上げてため息をつく。

収穫した林檎をいくら売つたとしても、修理費用を賄うことは不可能だろう。

「……空からお金が降つてこないかしら……？」

思わずそんな言葉が口から漏れる。十九歳の若い女性には似合わない言葉だが、すでに口癖になってしまっていた。

こんなフイリーネだが、一応侯爵令嬢という肩書きを持つている。荷馬車を使つて一人で森に出かけようが、質素な服を身に纏つていようが、舞踏会や夜会などの煌びやかな場に一度も行つたことがなかろうが、れつきとした貴族の一員だ。

キルシュ侯爵家といえば、由緒正しい家柄として知られている。大昔には宰相や大臣

といった人材を輩出し、時の国王の姫が降嫁したこともあった。それが今や広大だった領地のほとんどを売り払い、庶民同様の暮らしを余儀なくされている。それもこれも全ては曾祖父の放蕩のせいだった。^{はいじゅ}

フイリーネの曾祖父——先々代のキルシュ侯爵は女遊びや賭け事に明け暮れ、あつという間に身代を潰してしまった。その上、莫大な借金まで残して亡くなつたのだ。跡を継いだ祖父は仕方なく領地を切り売りして凌^{しの}いだが、領地が減ればそれだけ収入も少なくなる。借金を返すために領地を売るという悪循環を繰り返した結果、フイリーネの父がまだ小さいうちに立ち行かなくなつてしまつたという。

零落して王都の屋敷を畳み、狭い領地に引っ込むしかなくなつたキルシュ侯爵家は、次第に貴族社会から忘れられていった。

フイリーネも正直なところ、貴族令嬢としての自覚はなかつた。なぜなら大きな屋敷に住み、領民からお嬢様と呼ばれていようが、暮らし向きは彼らとほとんど変わらないのだ。使用人も少なく、父が幼い頃からキルシュ家に仕えてくれている、ベンとヘザーという名の老夫婦だけであつた。

給料もろくに払えないのに、見捨てずにしてくれる二人には感謝している。せめて彼らが引退する時に生活の心配がいらなくなるの退職金を渡してあげたい、というのが

当面のフイリーネの目標だ。

「……うーん。何かお金がばーっと稼げる方法はないかしら？」

そう呟いた時、正門の方からベンが走つてくるのが見えた。

「お嬢様あ！」

「あら、ベン。どうしたの？」

いつもはおつとりしているベンの慌てよう、フイリーネは眉をひそめる。馬車を止め待つていると、近くに来たベンが興奮した様子で言った。

「コール様がいらしてますよ、お嬢様！　すぐに応接室の方へいらしてください！」

「メルヴィンおじ様が……？」

メルヴィン・コール伯爵はフイリーネの父の幼馴染だ。キルシュ侯爵家が零落して田舎の領地に引っ込んだあとも交流が続いている、数少ない貴族のうちの一人でもある。

「まあ、メルヴィンおじ様がここに来るなんて何年ぶりかしら」

何しろ彼は、このグリーグバルトの宰相を務めているのだ。以前はお土産を手に時々訪ねてきてくれたが、宰相になつてからは忙しいようで、久しく訪れていない。

「前にいらしてからもう五年になりますよ、お嬢様」

ベンはさらりと答える。年をとつても記憶力のよさは健在だ。

「もうそんなになるのね」

フイリーネが頷きながらしみじみと呟くと、ベンは何かを思い出したようにハツとしたあと、馬車の方へ身を乗り出した。

「そんなことより、コール様がお嬢様にいい話があると！」

「いい話？」

なんのことだか分からずキヨトンとしたフイリーネだが、その意味を悟つて目を丸くする。

妙齢の自分に持つてこられた「いい話」とくれば、縁談しかないだろう。

どうりでベンがこんなに興奮しているわけだ。彼は常日頃からフイリーネの結婚について心配していたのだから。

「コール様のご紹介なら、きっととてもいいお相手に違ひありません。もう、お嬢様がお金の心配をする必要もなくなるでしょう。もともとお嬢様は器量よしなのです。キルシユ侯爵家^{ひくしゃけ}が貧窮^{ひんきゅう}しているとはいえ、社交界に出れば引く手あまただつたはずですよ」「……家が貧窮しているというのは由々しき問題よ、ベン」

十九歳といえど、この国では結婚適齢期真っ只中だ。それに貴族の令嬢なのだから、縁談の一つや二つあってもおかしくない。けれど、家が持参金も用意できないほど貧乏

で、社交界デビューすら果たしていないフイリーネに縁談は皆無^{かいむ}だった。

フイリーネ自身も結婚は諦めている。それに、家の経済状況のことばかり心配していって、自分の将来のことなど考えられないのが実情だ。だからこそベンも心配しているのだが……

「とにかく話を聞いてみるわ。応接室ね」

フイリーネは馬車を降りながら尋ねた。馬の手綱をフイリーネから受け取りつつ、ベンは頷く。

「はい。旦那様と奥様も、応接室でお嬢様の帰りを待つております」

「じゃあベン、この林檎^{りんご}を貯蔵庫^{じゆらうこ}に運んでおいて。話を聞いたらすぐ手伝いに行くから」

その言葉を聞いたベンは、皺だらけの顔に笑みを浮かべた。

「これしきのこと、私一人でも平気ですよ。それより皆さんお待ちですから、お急ぎください」

「分かったわ」

フイリーネはスカートを翻し^{ひるがえ}、貴族の女性とはとても思えない軽い足どりで応接室へ向かつた。

「おお、ファイリーネか。すっかり綺麗なお嬢さんになつたね」

応接室に入つたファイリーネを迎えてくれたのは、ふつくらした顔に人のよさそくな笑

みを浮かべるメルヴィン・コール宰相だつた。

「いらっしゃいませ、メルヴィンおじ様」

つられて笑みを返しながらファイリーネは挨拶をする。

「小さかつたファイリーネがこんなに大きくなるなんて、私たちも年を取るはずだな、ア

イザック」

コール宰相はファイリーネの父親であるアイザック・キルシュ侯爵に視線を向けた。キ

ルシュ侯爵は、微笑しながら頷く。

「そうだな」

「あら、おじ様は最後に会つた時から、ちつとも変わってらっしゃらないわ」

母親の隣に腰を下ろしつつ、ファイリーネはコール宰相に告げた。

痩せ型の父の倍はあると思われる、恰幅のよい身体。丸っこい目をした姿は、なんとなく獣を思わせる。そんな彼を一目見ただけで、「グリーグバルトにこの人あり」と言われるほど有能な宰相だと思う人はいないだろう。

「で、メルヴィン。忙しい君がわざわざこんな辺鄙な場所までやつてくるほどいい話と

な笑みを浮かべて囁く。
 「メルヴィン様が、あなたに直接話したいだと仰おつしつてね」
 「私に直接……？」
 それはおかしい。貴族令嬢の縁談となれば、まず親に話を通すのが一般的だ。いくら没落しかけているようが、平民同然の生活を送つていようが、キルシュ家は一応貴族社会に名を連ねている。

これはどう考へても縁談ではなさそうだ。もしかしたら、ファイリーネにいい働き口でも見つけてくれたのかもしれない。
 ……結果として、このファイリーネの考へは間違つていたが、ある意味正解だつたとも言える。コール宰相はファイリーネをじつと見つめ、背筋を伸ばしてこう切り出した。

「そのことなんだが、ファイリーネ。王太子妃になつてはくれまいか？」

「——は？」

フイリーネの口がポカンと開いた。

竜王の国、神に愛された国とも呼ばれるグリーグバルト。大陸有数の大國であるこの地を治めているのは、竜王の末裔まつえいと言われる王族だ。

現国王夫妻の間には一人の男子がいる。今年二十四歳になる王太子のジエスライールだ。

彼が若い頃の国王によく似た美男子で、女性たちの憧れの的だということは、辺境の地に住むフイリーネですら知っている。彼が誰を伴侶に選ぶのか、國中の人々が固睡かんすいを呑んで見守っていることも。

「フイリーネがジエスライール王子の妃に？」

キルシユ侯爵夫妻もフイリーネの隣でんぐりと口を開けている。三人の驚きを他所よそに、コール宰相はにこにこと笑いながら何度も頷いた。

「ああ、實に名譽なことだろう。なあに、曲がりなりにも侯爵令嬢だ。王族に嫁してもなんの問題もない」

「……ちょっと待ってください、メルヴィンおじ様！」

ようやく声を出せるようになったフイリーネは、慌てて口を挟んだ。

確かに侯爵家といえば、公爵家に次いで高い地位になる。ここが普通の國なら、侯爵令嬢が王太子妃に選ばれたとしてもなんの問題もないだろう。

けれど、ここグリーグバルトに限っては違うのだ。

「ジエスライール殿下の番は？ 番はどうしたんです？ 王族の妃には、番がなるのが習わしでしょう？」

そう、グリーグバルトの王族は人であつて人ではない。かつてこの世界の生物の頂点に立っていた竜族。その血を継ぐ、半竜半人なのだ。今やその血は薄れ、竜の姿を取ることはできないものの、常人が持ち得ない強大な「力」を持っているという。

それだけでなく、王族は竜族特有の性質も継いでいた。その最たる例が、番と呼ばれるたつた一人の異性を伴侶に選ぶことだった。

番に選ばれる相手は貴族も平民も関係ない。現に今の国王の番である王妃は、外交官の娘で下位の貴族出身だ。

王族はひとたび番を選べばその相手だけを愛し、他の異性には見向きもしないらしい。そのため、番は自動的に結婚相手として迎えられるのが習わしだった。

キルシユ侯爵夫人が、ぱあつと顔を輝かせる。

「もしや、フィリーネが王太子殿下の番なの？」

王族の番に選ばれ、一途に愛されることは、グリーグバルトの女性なら誰もが夢見るシチュエーションだ。自分の娘が王太子の番に選ばれたのだと考え、夫人が興奮するのも無理はない。

けれど、コール宰相は首を横に振った。

「いや、違う。番に選ばれたわけじゃないんだ」

でしょうね、とフィリーネは内心呟く。社交界デビュードころか、一度も王都に行つたことがないフィリーネは、当然王太子とも面識がない。そんな彼女が番に選ばれるわけがないのだ。

「では、なぜフィリーネを王太子妃に？」

キルシュ侯爵が不思議そうに首を傾げる。コール宰相は扉の方をちらりと見て、人の気配がないのを確認すると、声を潜めて告げた。

「これは本来なら国家秘密なんだ。だからこれから私が話すことは、他の誰にも言わないでほしい。もちろんベンたちにもな」

「……何か重大な事情があるんだな。分かった。誰にも言わないと誓おう」

神妙な顔でキルシュ侯爵が頷き、夫人もそれに倣う。最後にフィリーネが頷くのを見

て取ると、コール宰相は重々しく口を開いた。

「実は王太子……ジエスライール殿下には呪いがかけられていて、番を選ぶことができんのだ」

「……番を選ぶことができなくなる呪い？」

「フィリーネは目を大きく見開いた。

「正確に言えば、番が誰だか分からなくなる呪いだ。そのため、殿下は番を選ぶことができない」

「では、殿下が二十四歳になつても未だ番を選ばないのは、その人とまだ出会つてないからではなくて……」

「会つても分からないので、選びようがないだけだ」「……なんということだ。確かにそれは一大事だな」

キルシュ侯爵が眉を寄せて呟く。直後、彼はふと何かに気づいたように顔を上げた。「王族に呪いをかけることができるとは、相手は一体何者だ？　まさかグローヴ国の人かい？」

されかけた歴史があり、お世辞にも良好な関係とは言えない。

「いや、確かにグローヴ国は色々ときな臭いが、殿下の呪いに關しては違つ。ジェスラ
イール殿下に呪いをかけたのは、『沈黙の森の魔女』だ」

「魔女が？」

予想もしなかつた言葉に、フイリーネたちは戸惑う。

「沈黙の森」には魔女がいて、森に入つた人間を惑わすというのは、お伽噺のよう広く伝わつてゐる。だが、魔女に呪われたなどという話は聞いたことがなかつた。そもそも魔女の姿を直接見た者はおらず、存在を信じない人も多い。

「本当に『沈黙の森の魔女』なのかい？」

「ああ。殿下は十二歳の時に沈黙の森で魔女と顔を合わせ、その時に呪いをかけられた。その呪いは強力で、十二年経つた今も解けないままだ」

コール宰相は深いため息をつく。

「けれど、殿下には『番』が必要だ。いや、このグリーグバルト国にとつて必要なのだ。そこで、フイリーネに白羽の矢が立つた。表向きは番に選ばれたということにして、さつそく宮殿に……」

「待つて！ 待つてください、メルヴィンおじ様！」

フイリーネは慌ててコール宰相の言葉を遮った。

「つまり、おじ様は私に全国民を騙して、偽物の番になれと言つてるのね？」

「かいつまんで言うと、そういうことだ」

大きく頷くコール宰相に、フイリーネは胡乱な目を向ける。

王太子が番を見いだせないというのは確かに大問題だ。けれど、だからといって偽物の番を王太子妃に据えるとは、いささか乱暴すぎやしないだろうか？

しかも、偽物の番を選ばれたのが自分となれば、笑うに笑えない。

「國民に正直に説明した方がいいんじゃないの？ ジエスライール殿下の事情を」

そう言いながらもフイリーネには分かつてゐた。國民に向かつて王太子が呪われていると発表するのは難しいだろうと。

当然、コール宰相は首を横に振つた。

「そんなことはできない。殿下の事情を國民に知らせたら、國が傾きかねんからな」「まさか。そんな大げさな……」

思わず口にしたフイリーネを、コール宰相はじろりと睨んだ。

「この国にとつて王族の番がどれだけ重要なかを、フィリーネは理解できていないようだな。いいかい、フィリーネ。この国が豊かなのも、竜の血を継ぐ王族がいるからなのだ。それくらいは習っているだろう?」

「そりやあ、知っているけれど……」

かつて、ここは何も生み出さない不毛な大地だったという。だが竜王が人間の娘を番に選び、この地に国を興した。自然を操る竜王の力によって大地は潤い、豊かな国土となつたらしい。

竜王が亡くなり数千年の時を経た今も、この国は災害に見舞われることなく、恵み豊かな地であり続いている。それは、竜王の力を継ぐ王族がいるからこそ……というのは小さな子どもでも知っていた。

けれど正直に言つて、フィリーネは真実だと思つてない。王族の求心力を失わないための方便だと考へていたのだ。……王族至上主義なコール宰相の前ではとても口にできないが。

「そして王族が竜の力を維持できているのは、次代を生み出す『番』のおかげだ。ジエスライール殿下の問題は、わが国の存続に関わる。特にグローヴ国動きが活発になつてきている今はな」

そのコール宰相の言葉に、キルシユ侯爵がハツと顔を上げた。

「グローヴ国が戦争の準備をしているという噂は本当なのか?」「え?」

初耳だったフィリーネは驚いて父親の顔を見る。その視線を受けて、キルシユ侯爵が困ったように微笑んだ。

「流れの商人がそんなことを言つていたと、村人が報告してくれたんだよ。まさかと思つて、本気にしてはいなかつたんだが……」

「グローヴ国はもう、ここにまで届いているのか」

コール宰相は顔をしかめたあと、重々しく頷いた。

「噂は本当だ。やつらはまたこの国に侵攻しよう、戦争の準備を始めておる」

「なんてことだ。ここしばらくの間は平和だったのに……」

グローヴ国が前回戦争を仕掛けてきたのは、もう二十六年も前のことだ。その時は陸と海から同時に攻めてきたのだが、陸からの軍勢は「沈黙の森」を越えることができず、また海からの軍勢もグリーグバルトには到達できなかつた。当時はまだ王太子だったジーケフリード国王が自ら海軍を率い、グローヴ国船団を殲滅させたのだ。

「なあに、今度も殿下たちのお力があれば、グローヴ国など恐るるに足りん」

胸を張つて言うコール宰相だったが、不意に肩を落とした。

「……と言いたいところだが、今回は不安要素がある。ジェスライール殿下が呪いのせいで番を見いだせないことを、なぜかグローヴ国は知つておるのだ」

「なんですか？」

フイリー・ネたちは息を呑んだ。

「殿下の呪いのことはごくわずかな人間にしか知らされておらず、極秘とされている。現にグリーグバルトの国民に漏れた形跡はない。けれど、つい最近グローヴ国に放つていた密偵から、驚くべき報告があつたのだ。なぜかグローヴ国の王や重鎮が殿下の呪いのことを知つていて、これを侵攻の好機と見ていているとな」

「誰かが秘密を暴露した……ってこと？」

フイリー・ネが恐る恐る尋ねると、コール宰相は首を横に振った。

「分からぬ。グローヴ国も我が國に密偵を放つてゐるだろうから、そういった者たちが探り当たのかもしれない。なんにせよ、戦争が始まればやつらはその事実を流布し、国民を動搖させようとするだろう」

「でも……たとえ国民を動搖させたって、簡単に侵攻できるとは思えないわ。だつてグローヴ国との間には森があるもの。あそこは越えられないでしよう？」

この国は大陸から南に突き出た半島である。そして国の北側には、「沈黙の森」がまるで蓋をするかのように横たわっていた。陸から攻めるなら森を通らなければならないが、今まで他国の軍隊が森を越えられたことはない。森はずつとこの国を敵の侵攻から守ってきたのだ。

国民が森を恐れる一方で敬つてもいるのはそのためだ。けれど、人々の森に対する畏怖の感情が、ジェスライール王子にとつて不利になるかもしれないとコール宰相は言う。「その『沈黙の森』の魔女に殿下は呪われているのだ。グローヴ国軍の軍隊が魔女を味方につけ、今度こそ森を越えて侵攻してくるかもしれない——国民がそんな不安を抱けば、足並みは崩れるだろう」

少なくとも、王族の求心力が低下するのは必至だ。

「だからこそ、殿下の番が今すぐ必要なのだ。殿下が番を見つけて娶り、この国にはなんの不安要素もないことを内外に示さねばならない」

なるほど、とフイリー・ネは納得する。どうりでコール宰相が慌てて偽物の番を王太子妃にしようとしているわけだ。殿下が番を見つけたと示せばグローヴ国軍の動きを封じられるだけでなく、国民の不安を払拭することもできる。

番に目に見える印はなく、誰が番なのかを知ることができるのはジェスライール王子

だけだ。裏を返せば、彼が番だと認めれば、誰も異を唱えることはできない。

「分かつたわ。ジェスライール殿下に『かりそめの番』が必要なことは」

「フイリーネはうんうんと頷いたあと、コール宰相の顔を探るように見つめた。

「分からるのは、なぜ私が選ばれたのかということよ。おじ様もご存知の通り、うちには没落寸前で貴族と言つても名ばかりだわ。もつと適任の令嬢が他にいくらでもいるでしょうに」

フイリーネが目の覚めるような美人ならともかく、あいにく少々見られる程度の容姿でしかない。並みいる令嬢たちを押しのけて自分が選ばれる理由が思いつかなかつた。

「確かに貴族令嬢は他にもたくさんいる。だがな、めぼしい令嬢は殿下とすでに顔を合させてているんだ。今さら殿下の番とするには少々不都合でな……」

コール宰相が深いため息をつく。

竜族は相手を一目見れば番かどうか分かるのだという。初めて会つた時点で何も言わなかつたのに、今になつて番だと言い出すのは確かにおかしい。

ジェスライール王子が二十歳を過ぎても番を見いだせないことで、呪いのことを知らない重臣たちは焦り、事あるごとに大勢の令嬢を城に招いていたらしい。そのことが裏目に出ていた。

「彼らは舞踏会や茶会、若い令嬢たちの社交界デビューの場にまで殿下を引っ張り出して、顔を合わせる機会を設けていた。呪いのことは極秘だから反対するわけにもいかなくてなあ。おかげで殿下に目通りしていなない娘を見つけるのが大変で……」

コール宰相はしみじみと呟いた。ジェスライール王子と顔を合わせていない令嬢をなんとか探し出そうと、苦労してきたことが分かる。

ところが突然グッと拳を握ると、コール宰相はフイリーネを意味ありげに見つめた。フイリーネはうつと身を引く。

「だが、私は思い出したんだ。まだ殿下に顔を合わせていない高位の貴族令嬢がいることを！ フイリーネ、君のことだよ！」

「こんな時だけ思い出さなくていいです！」

「国^{くに}の存亡^{そんむう}がかかつておるのだ！ ほれ、この通り！ 殿下の番として王太子妃になつてくれ！」

ソファから滑り落ちるようにして跪くと、コール宰相はいきなり土下座をした。これにはフイリーネはおろか両親までもが仰天する。

「やめてよ、おじ様！」

「お、おい、メルヴィン」

「メルヴィン様……」

「頼む、フイリーネ。私やこの国を助けると思つて、引き受けてくれ！」
地面に頭を擦りつけてコール宰相は訴える。

「ちよ、ちよっと、ちよっと！」

これはあまりに卑怯な頼み方ではないかとフイリーネは思った。

「頭を上げてよ、おじ様！ 情に訴えるやり方は酷いと思うんですけど！ だいたい、殿下と会つたことがない人は私の他にもたくさんいるはずです」

王族の番は身分を問われない。つまり貴族でなくたつて構わないのだ。平民の中にはら、ジエスライール王子と顔を合わせたことがない娘は山ほどいるだろう。

「王都に美人で働き者だと評判の娘はいないんですか？ そういう娘を殿下が見初めたことにすれば、こんな田舎の没落貴族を番にするよりよっぽど説得力が……」

「もちろん本物の番なら平民でも構わないが、かりそめの番となるとそつはいかんのだ。万が一偽物だと知られようものなら、その娘の命が危うい」

もし本物の番でないとバレても、侯爵令嬢という身分がフイリーネを守ってくれる。貴族に危害を加えれば重い罪に問われるからだ。コール宰相はそう言いたいらしい。

「それにキルシユ侯爵家には、かつて王族が降嫁なさっている。フイリーネが王族の血も前のことだよ？ 王族の血なんかとっくに薄れて……」

「それがそうでもないんだ」
コール宰相が、がばつと上半身を起こした。
そこでキルシユ侯爵が異議を唱える。
「でもね、メルヴィン。時の王女殿下が我が家に嫁いできたのは、もう四百年も五百年も前のことだよ？ 王族の血なんかとっくに薄れて……」

「待つて、おじ様。誰が仰っているですって？」
この琥珀色の目が先祖返りだの、自分には力があるだと、色々気になることを言われた。だが、一番気になつたのはそのことだった。
「ジエスライール殿下だよ、もちろん」

「ああ、候補に挙がった女性たちを、ジエスライール殿下はわざわざ確認しに行かれたそうだ。そしてフイリーネを見た時、微かな魔力があるのを感じたらしく、それが決め手となつた。フイリーネを王太子妃に迎えたいと、ジエスライール殿下が自ら選んでくださつたのだぞ？ 名譽なことじゃないか」

「殿下は、いつ私を確認したというの？」

知らぬ間にこそそ見られて踏みされていたのだから、フイリーネとしてはいい気分はしない。

コール宰相は床に座り込んだまま首を傾げる。

「さあ？ 殿下は不思議な力をお持ちだからだな。気になるなら直接殿下に尋ねればいい。フイリーネにならお答えくださるだろう」

「……王太子妃になることを承知してはいないんですけど」

「フイリーネにとつても悪くない話だぞ？ このまま田舎に引つ込んでいても、嫁のもうらい手はない」

「それは……」

「もしかして王太子妃になることを承知してくれるのなら、悪いようにはしない。何よりキルシユ侯爵家は王太子妃の実家になるのだから、国から充分な資金援助を受けられるぞ」「資金援助……？」

「うむ。毎月五百万ルビーでどうだ？」
キラリと目を光らせながら、コール宰相は具体的な数字を挙げた。
「毎月五百万ルビー!!」

フイリーネは思わず声をあげた。ルビーというのは、この国で一番高額な通貨だ。
五百萬ルビーともなれば、キルシユ侯爵家の年収に相当する。
毎月五百万ルビーが入るのならば、家の修繕もできるし、ベンたちに給料を支払つても余裕で余る。失つて久しい土地も買い戻せるかもしれない。

フイリーネはぐくりと喉を鳴らした。
——私が王太子妃になるのを承知すれば、もうお金の心配はなくなる……
フイリーネの心がぐらぐらと揺れていることに気づいたコール宰相は、さらに畳みかける。

に――」

コール宰相の口元に笑みが浮かぶ。フイリーネを生まれた時から知っているので、彼女の心を動かす術^{すべ}を充分心得ていた。

「国王陛下によれば、殿下の呪いを解く方法がないわけではないそうだ。殿下の呪いが解けて本物の番^{つがい}が見つかれば、フイリーネが王太子妃でい続ける必要はない」

「……つまり、期間限定の王太子妃だというわけね？」

フイリーネの呴きに、コール宰相はしたり顔で頷いた。

「そうとも。単に宮殿に雇われただけと思つてくれればいいんだ」

単に宮殿に雇われただけ。その言葉は妙にフイリーネの心に響いた。

確かに、王太子妃になる代わりに資金援助を受けられるのだから、お金で雇われたとも言える。

それにジエスライール王子の呪いが解けて真の番が見つかれば、フイリーネの役目は終わるのだ。

「フイリーネ……」

両親が心配そうに見ていることに気づかず、フイリーネは胸算用をする。コール宰相の術中にまんまと嵌つていることも知らずに。

「じゃあ、十日後に迎えが来るからな」
しばし考え込んだあと、フイリーネは顔を上げた。
「分かつたわ。王太子妃になります。その代わり資金援助の件、忘れないでね、おじ様」

フイリーネの返事を聞くやいなや、そう言い残してコール宰相は帰っていく。

彼を乗せた馬車と護衛の兵士たちを玄関先で見送りながら、フイリーネはふと思つた。

――ジエスライール殿下は、どうして「沈黙の森の魔女」に呪われたのかしら？

コール宰相が言つたのは魔女に呪われたという事実だけ。原因については一切言及しなかつた。

――まあ、次に会った時でいいか。

そうのんきに考えるフイリーネは、コール宰相がいくつもの重要な事実をわざと隠したことにもまだ気づいていなかつた。彼がそそくさと帰つたのは、それについて質問されたくなかつたからだということにも。

馬車の姿が見えなくなると、両親が心配そうに声をかけてきた。

「フイリーネ。私たちのことなら気にしなくていいんだぞ？　いつそ貴族をやめて農夫になつても構わんし」

「そうよ。王太子妃になるのはとても大変なことだわ。私たちのためにあなたが重い責任を背負う必要はないのよ」

今ならまだ間に合うと口をそろえるキルシュ侯爵夫妻に、フイリーネは微笑んだ。
「大丈夫よ。王太子妃になるつて言つてもお飾りでいいんだもの。殿下に真の番が現れるまでのことだしね。……それに」

「おじ様はあんなふうに土下座までしてくれたけど、本来ならこれは断れない話なのでしょう？ 違う？」

「それは……」

キルシュ侯爵は言いよどんだ。

コール宰相は土下座して頼み込み、破格の条件まで示してくれたが、そこまでする必要はなかつた。彼はたつたひとこと口にするだけによかつたのだ。——これは王命だと。そう言わてしまえばフイリーネたちに逆らうことはできなかつただろう。コール宰相が王命だと言わなかつたのは、キルシュ侯爵家への気遣いに他ならない。

「おじ様がそこまで配慮してくれたんだから、今さら嫌だなんて言えないわ。それに、私はキルシュ家だけじゃなくて、ここが好きなの。土地や領民がね。私が王太子妃にな

ることで、みんなの暮らしが楽になるなら、こんなに嬉しいことはないわ」

侯爵家にお金がないばかりに、領民たちにも不便な生活をさせているという現実を、フイリーネは知つていた。

川が増水して橋が流されても、その建て直しすらままならないのだ。領民たちが木を切り出し、粗末な橋をつくつて急場を凌いでいるが、また洪水が起こればすぐに流れてしまう。

お金。お金さえあれば……。フイリーネはずつとそう思つていた。

喉から手がでるほど欲しいお金が、王太子妃になれば手に入る。どうして引き受けずにはいられるだろうか。

「王都ではおじ様が色々助けてくれるはずだし、お飾りの王太子妃としてのんびり過ごすつもりよ。生まれてこの方贅沢なんてしたことがないから、楽しみだわ」

フイリーネはいつも以上に明るく笑つた。

もちろん、偽りの番を演じなければならないのだから、そう気楽にはいかないだろう。でも、どんなに辛い目に遭つたとしても、キルシュ家と領地のことを思えば耐えられる。

「だから、私のことは心配しないで」

笑顔と言葉の裏に隠されたフイリーネの不安。それを分かつてはいるのか、両親の表情が晴れることはなかった。

* * *

『十日後に迎えが来る』

その言葉通りにきつちり十日後、キルシュ侯爵邸の玄関先には王家の紋章が入った四頭引きの馬車と、馬に乗った護衛の兵士たちが並んでいた。

持つてはいる服の中で一番上等なシユミードレスを着込み、私室の窓から外を眺めていたフイリーネは、予想以上に大げさな迎えに顔をしかめる。

——てっきり密かにお迎えだと思っていたのに。

これでは王族に縁のある重要人物が乗つていて、大声で主張しているようなものだ。確かに「番」は重要なが、これほど大々的にする必要はあるのだろうか？

そう思つていたフイリーネだが、馬車の中から現れた人物を見てハッとした。

扉から出でたのは、軍服らしき服を身に纏つた青年だ。明るい金色の髪が日に照らされてキラキラと輝いている。

——まさか！？

三階の窓からでは顔がよく見えない。けれど、王家の馬車から堂々と出てきた様子といい、伝え聞いていた容姿と一致する点といい、どう考えても「あの方」としか思えなかつた。

——どうしよう。お父様からは、呼ばれるまで部屋で待機していろと言われたけれど……

フイリーネはそわそわと部屋の中を歩き回る。思いもかけない事態になり、故郷を離れることへの寂寥感は一気に吹き飛んでいた。

しばらくするとヘザーが慌てた様子で部屋に飛び込んできた。

「た、大変です、お嬢様！ 殿下が！ ジエスライール殿下が来ておられます！」

——やっぱり……！

王家の紋章が入った馬車で來るのも、大勢の兵士を引き連れてはいるのも当然だ。王子本人が迎えに來たのだから。

「すぐに行くわ」

「お嬢様が來るのを待ちきれず、自ら迎えに來られたそうですよ。愛されていますね、お嬢様」

ヘザーは嬉しそうに顔をほころばせる。彼らが知っているのは、フイリーネがジエスライール王子の「番」に選ばれたということだけだ。

『なんという幸運でしょう！ お嬢様がいなくなるのは寂しいですが、このままお嫁にも行かず田舎でひつそり暮らされるのかと心配しておりましたので、喜ばしいことです』何も知らない二人はフイリーネに降つて湧いた幸運（と彼らは思つている）を喜んでくれた。彼らを騙すのは心苦しいが、真実を告げることはできない。

フイリーネはヘザーの皺だらけの手を取つて言つた。

「下では話す余裕がないかもしないから、ここで言つておくれ。ヘザー、お父様たちのことをお願いね」

「お嬢様……。はい、旦那様たちのことはご心配なさらず。おかげさまで使用人も増えましたし、家のことは私たちがしっかりと守りますから」

ヘザーは目を潤ませてフイリーネの手を握り返す。

コール宰相がやつてきた日の三日後、キルシユ侯爵家には支度金としてかなりの大金と、宰相が手配した使用人たちが届けられた。それだけでなく、家の修理工まで大勢派遣されてきたのだ。

彼らの素晴らしい働きにより、荒れ放題だった屋敷は見違えるように綺麗になり、往

年の姿を取り戻している。

ありがたいことだが、そんなコール宰相の気配りもフイリーネを逃がさないためだと分かっているだけに、どうにも追い込まれている感じがして仕方なかつた。それは両親も同じだろう。

でも言い換えると、王宮はそれだけ「番」を必要としているということでもある。だからフイリーネが「かりそめの番」の役目を果たしてさえいれば、コール宰相は約束を守つてくれるはずだ。

——だから、大丈夫。

そう自分に言い聞かせながら、ヘザーと一緒に玄関ホールに下りる。そしてフイリーネは、ホールの一角を占める華やかな集団に目を奪われた。

華やかというより壯麗と言つた方がいいかもしれない。剣を腰に差し、一糸乱れぬ様子で立ち並ぶ上級兵士たち。その中心にいるのは、青の軍服を身に纏つたジェスライール王子だ。

すらりと背が高く、一見細身だが、その立ち姿は周囲の兵士たちに少しも見劣りしていない。それどころか、ただ立つていて品格と威厳が伝わってくる。その姿に圧倒されて、フイリーネは声も出せなかつた。階段を下りきつたところで足

も止まってしまう。本当だったらジェスライール王子に自分から声をかけて、淑女の礼を取らなければならぬのに。

立ち尽くしたままのフイリーネに気づき、ジェスライール王子が微笑みを浮かべて歩み寄ってきた。

「フイリーネ」

やや長めの金髪に、明るい水色の瞳。若い頃のジーケフリード国王とよく似た端整な顔の持ち主で、元帥として軍の頂点に立っている。だが気質はいたって穏やかで、老若男女から広く支持されている——というのが、フイリーネの知つているジェスライール王子の情報だ。

それに、少年の頃の絵姿を見たこともある。王族に心酔しているコール宰相——当時はまだ宰相ではなかつたが——が、王族一家が描かれた絵を贈つてくれたからだ。それは田舎にて王族の姿を知る機会がないフイリーネのためだつた。

けれど、どうやらあの絵はジェスライールの煌びやかさや美しさを描ききれていなかつたようだ。すつと通つた鼻筋も、長いまつ毛も、色氣すら感じられる口元も、あの絵にはないものだつた。

——これなら、貴族女性たちが騒ぐのも無理はないわね。

徐々に近づいてくる美貌に目を見張りながら、フイリーネはそんなことを考えていた。
「フイリーネ。僕の『番』」
目の前に立つたジェスライールは、水色の目に甘い光を浮かべてフイリーネの手を取る。

「え？」

「君を迎えるこの時を待つていたよ」

やや掠れた声で優しく囁かれ、フイリーネは混乱した。

——い、一体何が起こつてゐるの？

けれど、彼の口元に浮かんだいたずらっぽい笑みに気づいて納得する。

——ああ、そうか。これはお芝居なんだ。

玄関ホールには兵士たちだけでなく、キルシユ侯爵夫妻や使用人たちも集まつていた。この中で真実を知つてゐるのはフイリーネと侯爵夫妻、それにジェスライールを含めてもわずか数人だけだろう。

つまり大部分の人間にとつて、フイリーネはジェスライールが待ち望んでいた「番」なのだ。ジェスライールはただ周囲の人々が期待する姿を演じてゐるだけに過ぎない。それならフイリーネも同じように振る舞うだけだ。なぜならジェスライールと自分は

ある意味、運命共同体なのだから。

「お迎えありがとうございます、殿下。私が【番】だなんてまだ信じられませんが、どうか末永くよろしくお願ひいたします」

「君は紛れもなく僕の運命の伴侶だ。こうして出会えたことを神に感謝しよう」

「番を見いだすことができない王族と、その「かりそめの番」。これから自分たちは、こんなふうに周囲の人々を騙していかなければならぬのだ。

「フイリーネ……」

キルシュ侯爵夫妻がおずおずと近づいてくる。それに気づいたフイリーネは、ジエスライールの手を離して両親に向き直った。

「お父様、お母様、行ってきます」

フイリーネが微笑むと、両親は悲痛な顔をした。

「気をつけてね。私たちのことは気にしなくていいから」

「そうだぞ。領地や領民も大事だけれど、フイリーネ以上に大切なものなんかないんだからな」

「お父様、お母様……」

フイリーネの目に涙が浮かぶ。自分で決めたこととはいえ、二人の傍を離れるのはどう



ても辛かつた。

「心配なさらいでください。キルシユ侯爵、それに侯爵夫人」
その声と共に、不意に肩に手を置かれた。フイリーネは驚く間もなく、ジエスライールの胸に抱き寄せられる。その瞬間、馴染みのある匂いがふわりと鼻を通り抜けた。

——水の匂い？

フイリーネは不思議に思つたが、次のジエスライールの言葉に気を取られ、匂いのことはすぐ忘れてしまう。

「彼女は僕が必ず守ります。……どんなことからも」

その声は低く、真摯な響きを帶びていた。だが、言葉の本当の意味に気づいた人間はどれほどいるだろうか。

キルシユ侯爵夫妻はもちろん気づいていた。そしてフイリーネも。

「どうか、くれぐれも娘を頼みます、ジエスライール殿下」

深々と頭を下げるキルシユ侯爵夫妻。ジエスライールはフイリーネを胸に抱いたまま力強く領いた。

「行つてらっしゃい、お嬢様！」

「お元気で！ 殿下、お嬢様をお頼み申し上げます！」

駆けつけた領民たちが見守る中、フイリーネはジエスライールに手を引かれて馬車へ向かう。

途中で何度も足を止め、集まつた領民や両親たちを、そして見違えるように立派になつた屋敷を振り返つた。ジエスライールは嫌な顔一つせず、そんなフイリーネに付き合つ。覚悟はしていたけれど、生まれてからずっと傍にあった全てのものと別れるのは、思いのほか寂しくて辛かつた。できれば今すぐこの場で前言を撤回し、あの屋敷に逃げ帰りたい。

でも、それはできないと分かつていた。あんなにフイリーネの結婚を喜んでくれる領民たちを前に、どうしてそんなことができようか。

今の自分にできるのは、彼らに不安を悟られないよう笑顔で別れることだけだ。涙を堪えて必死に笑顔を作るフイリーネ。そんな彼女をジエスライールは真剣な顔で見下ろした。

「フイリーネ。君の人生を狂わせてしまつてしまない。……でも、ご両親の前で言つたことは嘘じやない。我らが始祖、竜王グリーグバルトの名において、君を守るよ。命に代えても」

「ジエスライール殿下……」

その言葉は不安と悲しみに押しつぶされ、そんなフイリーネの心に温かく響いた。

「はい。よろしくお願ひします」

「水は飲めないと、王都へ向けてゆつくりと動き出す。

フイリーネはゆつくりと頷き、本物の笑みを浮かべた。

人々が見守る中、フイリーネとジェスライールを乗せた馬車が、王都へ向けてゆつくりと動き出す。

同じ頃、「沈黙の森」の中心にある小さな湖が、金色の淡い光を発していた。周囲では風もないのに木々の枝がざわめいている。

だがしばらくすると光は消え、森は何事もなかつたかのように元の静寂を取り戻した。

第二章 竜の一族

「大丈夫？」

「だ、大丈夫、です……」

心配そうなジェスライールに、フイリーネは笑つてみせた。だが胃の中のものが逆流しそうなのを感じて顔を伏せ、新鮮な空気を吸つては吐く。

そうしている間も馬車はゴトゴトと揺れ続けた。

「水は飲めそう？」

「はい。それ、くらいは……」

彼に手伝つてもらつて水を飲んだあと、フイリーネは力なく目を閉じる。今は水くら

いしか飲むことができない。それ以外を口にしたとたん吐く自信があつた。

この体調不良の原因は乗り物酔いだ。住み慣れた家を離れて三十分もしないうちに気持ち悪くなり、それがずっと続いている。